

外部評価委員意見書

外部評価委員氏名

稲 田 孝 司
岡 本 健 一
佐 藤 信
園 田 直 子
竹 本 幹 夫
玉 蟲 敏 子
野 口 昇

(50音順)

評価の観点

- 1) 総合的な事項
- 2) 自己点検評価に関する事項
- 3) 調査・研究に関する事項
- 4) 国際協力の推進に関する事項
- 5) 調査研究成果の発信に関する事項
- 6) 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項
- 7) 業務運営の効率化に関する事項
- 8) その他

外部評価委員名	
	<p>1) 国立文化財研究所を構成していた東京・奈良の2文化財研究所は、独法化以前の独立研究所時代からの伝統をふまえるとともに単一文化財研究所としての長所もあわせ、平成18年度は中期計画に沿って着実に事業を推進したと思われる。平成19年度からは4博物館とともに個別に国立文化財機構に属することとなったが、今後とも独立研究所・文化財研究所時代の長所を生かし、それぞれ独自の研究実績を積み上げつつ、博物館との間であるいは両研究所の間で新たな連携を模索されるよう期待したい。</p> <p>2) 細分された多数の事業項目を同等の比重で評価の対象とすることは、点検・評価が細かい事業まで及んで効果的である。ただ、年度の事業全体の中でどこに運営の力点があり、どこに困難があったのか、生きた姿が見えにくい一面もある。個別の業務実績書の前に、1頁程度の総括的な説明があつてよいかもしれない。</p> <p>3) 奈良文化財研究所における発掘調査は、飛鳥時代山田道を確認し（整理番号17、以下同じ）、あるいは蘇我氏に關係するらしい居館を発見する（18）など重要な成果があつたほか、藤原宮（14）や平城宮（9、10）、西大寺旧境内（11）などの継続した発掘調査でも着実に成果を蓄積している。同研究所では理化学的な研究手法の開拓や海外交流など近年とみに事業分野の多様化が進められているが、奈良盆地における発掘調査のほか、古都所在寺社の歴史資料に関する研究（6）、歴史的建造物の保存・修復・活用に関する研究（7）、庭園に関する研究（23）など、同研究所の背骨を形成してきた伝統的研究を維持・継続していることは、重厚な研究基盤を築くうえで、また基礎・基本に習熟した若手研究者を育成するという点できわめて意義が大きい。</p> <p>4) 東京・奈良の両文化財研究所とも、それぞれの調査研究事業（22、46～53等）を通じて国際協力の推進でめざましい成果をあげた。とくに研究者の相互派遣や招聘研修は長期的な効果が期待できる。</p> <p>5) 研究成果に関する学術的な報告書や定期刊行物（64～68等）は順調に刊行されており、オープンレクチャー（70）や公開講演会・発掘調査現地説明会等（71）で一般向けの解説にも努めている。解説ボランティアを育成し（79）、あるいは文化財関係ボランティア活動への支援（80）を通じて研究成果の普及をはかる意味も大きい。将来的には、英国のイングリッシュ・ヘリテージやナショナル・トラストの一般市民による支援組織のようなもの、あるいは日本の各地博物館で組織されている「博物館友の会」的なものが検討されてよいかもしれない。</p> <p>6) ①現在の高松塚石室解体と壁画保護に関する事業（44）について文化財研究所は重要な役割を果たしてきたが、今後における壁画の恒久的保存施策の検討にあたっては、行政上の観点とは別に、保存科学上の調査成果をふまえつつ学術的な観点を積極的に反映させるよう努めることが期待される。 ②文化財研究所が文化財保護法改正にそつて文化的景観に関する調査研究を開始したこと（1）は時宜を得たものであり、今後、文化庁および地方公共団体における景観調査や保護行政を学術面から支援する研究所の役割はますます大きくなる。文化的景観の基礎的な考え方についても検討してゆくとのことであり、そうした際には、趣旨はやや異なるかもしれないが、国・県等がすでに指定している史跡・名勝・天然記念物等の周辺景観をよりよく保全できる波及効果も視野に入れつつ検討することが期待される。</p> <p>7) 特になし</p> <p>8) 特になし</p>

外部評価委員名	
	<p>1) 高松塚・キトラ古墳の保存対策関連の事業について 長期にわたる周到な研究・開発・実験と、細心の作業のすえに、高松塚壁画は無事解体され、新事実も明らかにされました、「研究所は完璧に責任を果たした」と評されています。しかし、「適時性の判定A」という自己評価は、いかがなものでしょうか。 「焦眉の難題を速やかに解決した」という局所的な観点にかぎれば、判定に異論はありませんが、「観点をズラせて」大きな高松塚保存の立場でみれば、「こんなはずではなかった。決断が遅すぎた」と、多くの国民は嘆いているのではないのでしょうか。「決断」は、もとより、研究所の責任ではありません。文化庁は専門家の衆知を集めて、科学的に・民主的に対策を講じようとして、国民は固唾を呑んで見守った。そのなかで刻々と壁画の飛鳥美人は黒黴に侵され、ついに無惨な黴爛状態に陥ったのでした。文化庁行政でも専門家の意見が分かれたとき、速やかに政治的・社会的な決断がくだせる危機管理システムが必要だったのでは、後思案ながら痛感されます。 日本文化と社会の「中空構造」を明らかにされた前長官が、道半ばで倒れられたのは、ご自身ご無念だったでしょう。ご一考をお願いします。</p> <p>2) 過去 5 年間の個別的な業務評価から、今回の総合的な評価に変更されたのは、適切であったと思われます。熟知しない個々の業務についてA～Cの判定をつけることは、大きなプレッシャーを感じるものです。「評価法」の変更について、事前にご案内をいただいておりますが、会議の冒頭でも簡単にご説明をお願いすべきだった、と反省しています。</p> <p>3) 両文化財研究所の調査・研究の実績と貢献にたいする評価は、確立しています。奈良時代や中近世の庭園についても着実に成果をあげてこられた。今年度より平安時代の庭園に着手されたので、学界の研究を飛躍させる効果が期待されます。</p> <p>4) 埋文センター設置のころと比べると、研究所の協力体制は、国内からアジア全域にまで広がっています。それも、一方的な忘己利他の菩薩行的段階から、中国・韓国との共同研究にみられるごとく相互利益の段階に移行しつつあるようです。リーダーシップへの拘りは最早、いかがでしょう。</p> <p>5) 建国記念の日、甘樫丘東麓遺跡の現地説明会は、時々小雨の空模様にもかかわらず、5,000 人超のファンが参加しました。私もそのひとりですが、主催者側もわざわざ列を縫って現説資料を配って回った。臨機の対応でしょうが、心きいたサービスで、参加者に大いに歓迎されていました。 それと比べると変ですが、収集資料・図書一般利用者が年間 220 人というのは、少なすぎのようです。開館日 1 日平均 1 人弱。HP 上でももう少し目に付く工夫は、できないのでしょうか。</p> <p>6) 有形／無形文化財を問わず、例年通り、適切に協力・助言されています。</p> <p>7) 経費節減のノルマ達成は年々きびしくなるでしょうが、今後とも国民の期待にお応えください。</p> <p>8)</p>

外部評価委員名	
<p>1) 国家の文化事業の根幹を支える研究機関として、広汎かつ精力的に活動を展開しており、その努力は高く評価出来る。業務内容の効率化の面でも成果を上げているが、予算圧縮の度合いが過重ではないかとの危惧を感じる。</p> <p>2) 周到なデータ分析に基づく網羅的な点検作業を行っている。所員個人による学界での業績には個別の言及がないように見受けられたが、学界周知の卓見が本研究所員によって提起されている例は少なからずあり、それが研究所としての質を支えてもいるので、もっと積極的にアピールすべきか。</p> <p>3) 研究スタッフの質の高さを反映した、すぐれた調査・研究能力を認めうる。紀要や報告書等の刊行物も、多種多様であり、きわめて有用である。古代的遺跡の調査報告は社会的なセンセーションを巻き起こした。無形文化財研究も新境地開拓が期待できる。</p> <p>4) アジア全域にわたり、顕著な国際貢献をなしとげた。今後も多様な分野で、アジア文化財保存・修復事業への積極的な関与が望まれる。国際研究協力も更なる展開が期待される。</p> <p>5) 一兩年の間にホームページのアクセス数が飛躍的に増加しており、発信情報の充実と一体の現象として高く評価できる。全国の国立研究機関のホームページは、近年とくに充実の度合いが著しいが、その中でもすぐれて有用な内容を備えている。紀要類の電子ファイル化やデータベース充実も社会に益するところ大である。</p> <p>6) 助言・協力は適切に行われている。また、外部機関からの受託研究も非常に多く、研究機関としての充実に貢献している。助言・協力に関する依頼は今後も増加が見込まれる。</p> <p>7) 着実かつ断固とした効率化の施策が取られているようであり、過去五年間を通じ、当初目標を100%達成する成果を上げた。今後も努力が要請されているが、効率化＝予算削減という図式は必ずしも好ましいものではない。重点領域への予算の傾斜配分や、外部資金導入についての努力などの工夫が必要かと思われる。</p> <p>8) 全体的に効率的かつ有効に運営されており、自己評価内容は適正と判断される。</p>	

外部評価委員名	
	<p>1) 文化財研究所の活動は、考古・遺跡・建築、情報、歴史、保存科学、無形文化遺産、美術・歴史、国際と多彩である。このように活動が多岐にわたるため、業務実績書が事業ごとにまとめられているのも無理のないことなのだが、それぞれの事業において十分な成果があげられていることがよく分かる一方で、研究所内のそれぞれの担当部局が互いにどのように連携・協力し、その結果どのような新たな成果や知見が生まれたのかが、外部の人間には見えにくくなっている。総合的に活発な調査研究活動が実施されているので、この点がとくに惜しまれる。</p> <p>なお、以下の記述は、とくに保存科学に関連した事項を中心にしている。</p> <p>2) 適切に自己点検が実施されている。</p> <p>3) 文化財を調査・研究するための新しい手法の開発が、予防保存（preventive conservation）の一環といえる材質分析、材料・技法の解明、生物劣化対策、保存環境整備から、実際の保存・修復（curative conservation）まで、幅広く進められている。新規手法の開発では、無機化合物の非破壊調査など既に応用研究の段階に入っているもののほか、有機化合物の材質分析、新しい年輪年代測定技術、考古資料の材質・構造調査、生物被害の早期発見のための新規手法、モデル実験やシミュレーションによる環境解析、屋外文化財の保存対策などに係る実験・基礎研究が進行中であり、今後のさらなる展開を期待している。修復材料に関する調査研究では、伝統的材料のみならず、使用の歴史がまだ浅く、経年による物性・特性変化に未知の部分が多い合成樹脂という新しい材料も視野にいれているところが評価できる。</p> <p>キトラ古墳の壁画取り外しにあたってダイヤモンドソーを利用する手法の開発をおこなうなど、緊急課題に的確かつ迅速に応える体制となっている。</p> <p>4) 国際研修「紙の保存と修復」は、紙文化財に関する日本の修復材料・技法を海外の専門家に理解してもらう好機になっている。過去の研修生のなかには、この研修で学んだことを自国で応用できるようにするのは自らの責任との自覚のもと、教育・普及活動を続けている人がいることも聞いており、海外での評判も高い研修と理解している。</p> <p>在外日本古美術品保存修復協力事業や、近代文化遺産の保存修復の調査を通じて、欧米諸国の博物館・美術館との間に協力体制が築かれており、このような文化財保存の活動を通じて、日本という国に対する理解や関心が高まることを期待している。</p> <p>5) 調査研究の成果を、逐次、報告書や研究所論文集をはじめ、国内外の学会、シンポジウム等で公開するとともに、外部資金による刊行物の英語版出版に取り組んでいる事例もあり、順調に出版が進んでいる。</p> <p>キトラ古墳や、高松塚古墳の保存・活用にあたっては世間の注目を集めていることもあり、とくに関西地方では新聞をはじめとするメディアからの発表が連日のようにある。第三者からの発言があまりにも多いので、保存・修復の措置が一段落した時点で、文化財研究所が実際におこなっている調査研究の成果やデータを集約し、科学的視点で検証・解析し、その結果を公開することで、後世に継承できる記録を作成していただきたい。</p> <p>6) 保存担当学芸員研修は、国内の博物館・美術館職員の保存科学の知識や技術をレベルアップする、日本で唯一の研修の場になっている。一回かぎりの参加ではなく、研修した後のフォローアップ研修も企画し、実行している点が特筆できる。研究生間にネットワークができるという効果もある、このような活動はあまり表にはでてこないが、是非、これからも継続していただきたい。</p> <p>キトラ古墳、高松塚古墳で多くの時間と人員がとられているにもかかわらず、地方公共団体をはじめ、海外の文化財の修復や整備に関する調査や助言、日本各地の遺跡の測量・探査も適切に行われている。</p> <p>文化財防災のデータベース化事業では、将来的にその分析から災害予測が可能になれば、国内の文化財防災の大きく寄与することになる。この活動が孤立することなく、関連する他のNGO団体、学会、研究会等とうまく連携したネットワークがつけられることを希望する。</p> <p>7) 適切に実行されている。</p> <p>8) 連携大学院と連携して大学院教育をおこなうことで、次世代の人材育成となる教育活動に貢献している。</p>

外部評価委員名	
	<p>1) 文化財とその保存のための専門的な調査・研究に果たす文化財研究所の役割は、さらに重要になってきているように思う。それぞれの調査・研究の面で十分に順調な成果を挙げつつあることは評価したいが、さらに学界的にも国際的にもより積極的な役割を果たすための努力を期待したい。東京と奈良の文化財研究所が一つの組織となったメリットを、さらに追求されることを望みたい。</p> <p>全体として、調査・研究の成果をもっと分かりやすい形で国民に対して公開・還元するためのなお一層の努力を望みたい。</p> <p>多くの有益なデータベースが公開され、ホームページのアクセス件数も、急増して東京で135万件、奈良で103万件に達するということは、喜ぶべき達成と考える。ただし、多種類の文化財に関する多様な情報が、総合的に整理されて分かりやすく提供されているとはまだいえないように思う。総合的な文化財情報のあり方とその発言について、文化財研究所が今後とも指揮的な役割を果たしていただきたい。</p> <p>高松塚古墳・キトラ古墳の壁画・古墳の調査・保存・活用をめぐる文化庁事業への協力については国民的な関心と呼んでいることから、その調査研究成果の発言について、ぜひ文化財研究所としての戦略的な配慮を望みたい。</p> <p>また、運営費交付金以外の財源として科学研究費に限らず、民間の研究補助金や外部からの寄付などの獲得にも、今後努力する必要があるだろう。</p> <p>2) 簡潔な業務実績報告を受けて、自己点検評価のシステムが段々と定着してきたことを感じた。このシステムが慣習化することなく、評価の成果が個々の研究所員の方々によって有効に利用されるよう、望みたい。</p> <p>3) 発掘調査、無形文化遺産、古寺社の歴史史料、文化財保存科学、保存修復技術など、多様な文化財についての調査・研究に順調な成果をもたらしたものと評価する。</p> <p>文化財防災計画についての研究は、緊急性のある今日的なテーマであり、さらに成果を挙げられるように期待したい。</p> <p>4) ①海外の文化財調査・保存修復事業・専門的人材養成への協力、②海外の文化財研究機関との交流、③在外日本文化財の保存・修復・調査への協力、④海外の担当者を招いてのシンポジウム・研究会の開催などに、大きな成果を達成していることは評価したい。</p> <p>なお、海外の保存修復専門家養成のための教科書・ビデオDVD（日本語版・英語版）を作成したというが、所内研修用だけにしか利用されていないのは、もったいないのではないかと。</p> <p>5) データベースの公開、報告書の刊行、シンポジウム・研究会の開催や、所員による学会での研究報告など、調査研究成果の発信は順調に進められているものと評価する。また、公開講演会・現地発掘調査の現地説明会・オープンレクチャーなど、一般市民向けの発信にも努力が払われていることに注目したい。一日に5000人も参加者を数える飛鳥での現地説明会などの機会を、文化財研究所の業務全体の成果発信にも活用できないかと。</p> <p>一般市民向けの発信は今後さらに展開されることを期待したい。例えば、大学が行っている「オープンキャンパス」のような、文化財研究所の多様な事業を理解してもらうための研究所の「公開日」などは設けられないかと。</p> <p>上記したが、とくに高松塚古墳・キトラ古墳の壁画・古墳の調査・保存・活用をめぐる文化庁事業への協力については、国民的な関心と呼んでいることから、その調査研究成果の発信についてぜひ文化財研究所として戦略的な配慮を望みたい。</p> <p>6) 発掘調査・保存処理・史跡整備・活用に対する指導・助言や文化財担当者への研修などに、順調な成果を挙げているものと評価する。</p> <p>緊要な課題として、地方公共団体による「文化財防災計画」策定事業の推進について、文化財研究所として、指導的な役割を果たしていただきたい。</p> <p>7) 削減率の高かった物件費において、光熱水費の効率化などによって高い効率化を達成したことは、大いに評価されよう。</p> <p>柔軟な人員配置への取り組みもふくめて、効率化によって得られた量的な資源を、どのように効率的に再配分して調査研究業務の質的な向上をもたらすのか、今後の大きな課題であろう。</p> <p>8) 文化財学の諸分野において一流・第一線の研究者を擁する研究所として、大学院・大学などにおける文化財学の教育・研究に対する協力は、後継者養成だけでなく、文化財学の裾野の広がりによる文化財保護の振興をめざす上でも必要と考える。是非、大学院教育への連携をさらに継続していただきたい。</p>

外部評価委員名	
<p>1) ひと口に文化財といっても奈良と東京の各研究書の事業の範囲、対象に差異があり、また各分野においても相違があるが、総合的に事業への取り組み、進行において順調であると評価される。</p> <p>2) 奈良・東京の両研究所はともに定性・定量評価はA、よって総合的評価をAと下しているが、実績書の内容やヒアリングから判断する限り妥当といえる。</p> <p>3) 奈良・東京ともに活動の内容・目的において差異があり、一律に判断するのは難しいが設定目標に向かう順調な努力が窺える。</p> <p>4) 東京の文化遺産国際協力センターの活動が顕著だが、修復技術部、美術部、奈良の企画調整部においてもこの分野への積極的な取り組みが評価される。</p> <p>5) 奈良の都城発掘調査部の現地説明会のごとき一般向けの発信や、東京の企画情報部のように研究者向けのサービスなど多様なターゲットがきめ細かく意識されており、多方面の活用、受信が期待されるので評価できる。</p> <p>6) 文化庁から受託業務に対する協体制の整備、また地方公共団体及び博物館等への助言活動も順調に進展しており、確実な成果を上げている。</p> <p>7) 少ない専従スタッフを他機関・他部局からの連携で補填しており、全般に効率化への努力が窺われる。</p> <p>8) 短時間で二研究所の多様で厚みのある事業の全体像を把握するのは難しいが、的確に業績書が書かれているので判断上、有効であった。</p>	

外部評価委員名	
	<p>1) 独立行政法人文化財研究所は、我が国で唯一の文化財に関する総合的かつ専門的調査の研究機関として、多方面にわたる質の高い活動を展開しており、国内外で貴重な貢献を行ってきている。 これらの活動は、今後益々重要性を増してくるものと考えられ、さらなる発展を期待したい。</p> <p>2) 自己点検は、全体として客観的かつ適切に実施されていると思われる。</p> <p>3) 国の施策等を踏まえて、調査・研究が実施されてきたことを評価する。なお、注目を集めている“文化的景観”については、ユネスコをはじめとする世界の動向を調査しつつ、さらにその概念を明確化していくことに貢献されることを期待したい。</p> <p>4) アフガニスタン（バーミヤン）、カンボジア（アンコール）、タイ（スコータイ）ベトナム（ミソン）、イラクおよび中国等の遺跡保存を通じて、貴重な国際協力を推進されていることを高く評価したい。また、途上国の専門家訓練も重要な仕事である。「海外文化財保護協力法」の制定もあり、今後さらなる貢献が期待される。</p> <p>5) 多様な定期刊行物の発行、ホームページの拡充、国際シンポジウムや公開講演会、公開学術講座の開催など、関連事業は順調かつ適切に実施されている、と思われる。</p> <p>6) 文化財の保存等に関して、国、特に地方公共団体に対して、専門的立場から助言や協力を行っていることを評価したい。なお、今後は、地域における無形文化財や民俗文化財の保護についても、地方公共団体等への助言や協力の必要性がさらに高まってくるものと思われ、この面での貢献にも期待したい。</p> <p>7) 平成18年度においても、予算の減額が続く厳しい状況の中で1.61%の効率化が達成されたことを評価したい。</p> <p>8) 有形の文化財の保存と相まって、無形文化財の保護や継承が重視されてきており、この分野においても、文化財研究所が重要な役割を果たすことを期待する。</p>